

## ○第 147 回北海道精神神経学会

日時：2025 年 7 月 13 日（日）午前 10 時 00 分～

場所：北海道大学医学部学友会館フラテ ホール

会長：加藤隆弘（北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野  
精神医学教室）

### 1. プロマゼパムの減量に伴い、てんかん発作が再発した 1 例

……横山健気，日下部聖樹，澤田浩美，秋山 久（岩見沢市  
立総合病院精神神経科）

症例は不安神経症で通院中の 60 歳代男性。20 歳代からベンゾジアゼピン系抗不安薬による加療が継続されていたが、X-6 年に意識減損発作の群発を呈したことからてんかんの診断が追加され、以降、レベチラセタム 1,000 mg により発作は消失し経過していた。不安症状も寛解しており、X-1 年 7 月より抗不安薬を漸減したが、プロマゼパム減量中の X 年 2 月に意識減損発作が再発し、脳波検査では意識減損に一致した density-modulated spectral array (DSA) の変化を認めた。その後、プロマゼパムの増量により発作は消退し、脳波上も改善を認めた。ベンゾジアゼピン系抗不安薬はしばしば長期処方され、減薬が推奨される薬剤である。ただ、てんかんに保険適用をもつ薬剤以外にも抗けいれん作用を有するため、減量に際しててんかん発作増悪への注意が必要であると考えられた。なお本発表にあたり、患者の個人情報保護に十分配慮し、本人より発表および抄録の雑誌・オンラインでの一般公開について同意を得た。

### 2. 心因の影響が強く考えられたカタトニアの 1 例

……野口博人<sup>1)</sup>，菱山真広<sup>1)</sup>，菅野 猛<sup>2)</sup>，市川香識<sup>1)</sup>，大宮友貴<sup>1)</sup>，橋岡禎征<sup>1)</sup> (1) 旭川医科大学精神医学講座，2) 名寄市立総合病院心療内科・精神科)

カタトニアは蠟屈や昏迷などの特徴的な症状を呈する症候群である。統合失調症に伴うものが多いとされていたが、あらゆる精神疾患や身体疾患、心因性でも発症しうることが報告された。今回われわれは、解離性障害を背景とし、医療者やパートナーとのトラブルを契機にカタトニアを呈した 40 歳代男性の 1 例を経験した。患者は「急に幼稚な調子で話すようになった」と当院受診。身体的異常を認めず、当初は解離性障害を疑ったが、カタトニアの診断基準を満たしていたため、ロラゼパムとクエチアピンでの治療を行った。症状改善したためロラゼパムおよびクエチアピンの減量を試みたが、いずれの減量でも症状の増悪と、再増量による改善を認めた。このことから心因の影響が強く疑われても、カタトニアにおいては薬物療法が重要であることが示唆された。なお、本症例報告に際し、発表と抄録の雑誌・オンラインでの一般公開について本人より同意を得ており、個人情報とプライバシーの保護に十分配慮した。

受付日：2025 年 8 月 14 日

受理日：2025 年 9 月 19 日

doi：10.57369/pnj.26-024

### 3. 行動障害への対応に苦慮したプラダー・ウィリー症候群の1例

…………高塚厚志, 栗田紹子, 横浜 愛, 松山大輝 (市立稚内病院精神神経科)

プラダー・ウィリー症候群において発達段階で特徴的な臨床症状を呈することが多く, 内分泌学的異常に加えて, 知的障害や特異な性格異常, 行動障害といった神経学的異常を認め, 対応に難渋することが多い. 今症例は中学生男児で, 些細なことを契機に暴言・暴力といった行動障害を認め, 小児科からの紹介で当科介入を開始した. 向精神薬の調整に加えて, 本人・家族への疾患教育や精神療法, そして当院精神保健福祉士を軸とした関係各所との密な情報共有・連携を続けた. しかし, 家庭内や学校での衝動的な暴力行為は抑制されず, 薬物療法では忍容性の問題から調整に難渋し, 当科入院加療を複数回要した. 医療的なかかわりのみでは限界があり, また地域的な課題や本人の特性も相まって環境調整は難航したが, 多職種および関係各所と協議連携しながら支援を続けている. 治療過程における本人へのかかわり, 薬剤・環境調整について報告した. なお, プライバシー保護と倫理的配慮をしており, 発表と抄録の雑誌・オンラインでの一般公開に関して本人・保護者から同意を得ている.

### 4. 高度肥満を合併した統合失調症患者に対して GIP/GLP-1 受容体作動薬が著効した1例

…………新福伸久<sup>1)</sup>, 荒嶽達也<sup>1)</sup>, 中鉢太郎<sup>1)</sup>, 澤山初音<sup>1)</sup>, 末岡智文<sup>1)</sup>, 青木真弓<sup>2)</sup>, 高津和哉<sup>3)</sup>, 本間裕士<sup>1)</sup>(1) 独立行政法人国立病院機構帯広病院精神科・神経科, 2) 独立行政法人国立病院機構帯広病院循環器内科, 3) 独立行政法人国立病院機構帯広病院薬剤部)

高度肥満のため入退院を繰り返していた40歳代女性の統合失調症症例について報告した. 高校生で発症し20歳代後半で幻覚妄想状態のため当科を初診した. 初診時の体重は70 kg (BMI 28) であったが, 30歳代前半で120 kg (BMI 49), 最大で159 kg (BMI 65) まで増加した. その後, 肥満に起因するII型呼吸不全や減量目的での入院が繰り返され, 当科だけで32回の入院歴がある. X年3月に呼吸不全のため当院循環器内科で入院となりICUに入室となった. その後, 当科へ転科となり発表者が主治医として担当した. 循環器内科と連携し糖尿病治療薬のGIP/GLP-1受容体作動薬チルゼパチドを導入した. その結果, 30歳代以降で初めて体重が100 kgを下回り, 95 kgで退院し, その後も著明な体重増加を認めなかった. 本症例報告に際しては, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分に配慮している.

### 5. 帯広厚生病院に自殺企図で救急搬送された未成年者の心理社会的特徴

…………山崎杏菜<sup>1,2)</sup>, 高橋昌大<sup>1)</sup>, 佐藤謙太郎<sup>1)</sup>, 河西千秋<sup>2)</sup>, 古瀬研吾<sup>1,2)</sup>(1) JA北海道厚生連帯広厚生病院精神科, 2) 札幌医科大学医学部神経精神医学講座)

近年, 未成年者の自殺者数は増加傾向にある. 本研究は, 未成年の自殺未遂者の心理社会的特徴を明らかにすることを目的として実施された. 【対象と方法】2022年度から2024年度に帯広厚生病院に自損行為で救急搬送された18歳未満の患者の基本属性, 企図の背景や特徴を調査した. 本研究は帯広厚生病院倫理委員会の承認を得て患者が特定されないよう配慮した. 【結果と考察】全救急搬送者は250名であり, 未成年は22名で中学生が7名, 高校生が14名であった. 企図動機は7例が父母との関係, 5例が学校での対人関係, 3例が学業であった. 企図手段は過量服薬が12例, 飛び降り7例であり, 10例で知的障害や発達障害の併存が確認された. 未成年者の自殺関連行動の動機に家庭や学校での問題の関与はすでに明らかになっているが, その背景に発達特性による学校での不適応, スマートフォンの不適切使用, 両親からの不適切な養育の関与が示唆された.

### 6. 札幌医科大学附属病院神経精神科における精神療法専門外来…………廣瀬奨真<sup>1)</sup>, 田所重紀<sup>1)</sup>, 齋藤京史郎<sup>2)</sup>, 河西千秋<sup>1)</sup>(1) 札幌医科大学医学部神経精神医学講座, 2) 砂川市立病院精神科)

精神療法は精神科医にとって中心的治療技術であり, その職能的アイデンティティの核である. しかし現場では, 必ずしもその教育機会が常時提供可能なわけではなく, 実践や継承が案外困難である. こうした状況もあり, 札幌医科大学附属病院神経精神科では, 精神療法専門外来を開設し, 身体症状症やPTSDなど, 往々にして薬物療法以外に精神療法の展開が重要となる疾患に対して森田療法や認知行動療法などを実施するとともに, これを研究・教育の場としている. 本発表では, こうした取り組みを紹介し, 今後の地域医療への応用可能性について, その意義などについて考察した. なお, 本専門外来で行われている研究は, 札幌医科大学附属病院臨床研究審査委員会による承認を受け, メンタルヘルス岡本記念財団および科研費(24K06527)による助成を受けており, また患者本人からは, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について同意を得ている.

## 7. 北海道における性別違和と外来受診者の精神疾患有病率とパーソナリティ傾向

…………古俣皓涼, 大江 開, 中島弥哉子, 大井達也, 柏木智則, 河西千秋 (札幌医科大学医学部神経精神医学講座)

性別違和当事者への適切な心理社会的支援を検討する目的で, 2024年7月から2025年5月に札幌医科大学附属病院の性別違和専門外来を受診した当事者を対象に, 精神疾患有病率とパーソナリティ傾向を調査した。本研究は, 札幌医科大学臨床研究審査委員会の承認を得て実施された。【結果】対象は42名で, male to female (MTF) 21名 (平均32歳), female to male (FTM) 21名 (平均27歳)であった。精神疾患有病率は, MTF, FTMでそれぞれ63.6%, 47.6%であった。MTF全体の平均値をみると, 神経症傾向が高く, 調和性, 誠実性が低値で, FTMでは開放性が高値であった。【考察】対象者の精神疾患有病率と分類は, 先行研究と同様であった。MTFとFTMは異なったパーソナリティ傾向を有することが示唆され, 多様性に留意した支援が必要であると考えられた

## 8. 20年以上の長期入院を経て地域移行に至った統合失調症をもつ患者の1例

…………秋山 久<sup>1)</sup>, 今里麻里<sup>2)</sup>, 秋田佳祐<sup>2)</sup>, 横山健気<sup>1)</sup>, 日下部聖樹<sup>1)</sup>, 澤田浩美<sup>1)</sup> (1) 岩見沢市立総合病院精神神経科, 2) 岩見沢市立総合病院精神医療センター)

症例は統合失調症をもつ60歳代女性。被害妄想に左右された言動が続きX-22年当院に医療保護入院となった。被害妄想による拒薬や拒食があり治療は難航したが, 薬剤調整により症状は軽減しX-9年任意入院に変更。しかし, その後も拒食や他患とのトラブルが散見され, 家族からはかかわりを拒まれ, 本人の退院希望もなく入院は長期化した。X年4月主治医交代後まもなく本人より退院希望があり, あらためて多職種で退院の可能性を検討し, 本人の妄想や不安などに配慮しながら環境調整を行い, 病状の悪化なくX+1年1月サービス付き高齢者住宅に退院となった。長期入院の患者においてもさまざまなきっかけによる本人の意向の変化を拾い上げ支援することで, 地域移行が可能な場合もあることを再認識し, 個別的な対応が行える診療体制の重要性を感じた。なお, 本発表にあたり発表および抄録の雑誌・オンラインでの一般公開について本人から同意を得ており, 個人情報保護にも配慮した。

## 9. 心身症と3年間診断されていた大麻関連嘔吐症の1例

…………若林伊織, 嶋岡修平, 田辺 康, 富永英俊, 中島公博 (医療法人社団五稜会病院)

Cannabinoid hyperemesis syndrome (CHS)は, 2004年に欧米ではじめて報告された比較的新しい疾患であり, 慢性的な大麻使用歴, 入浴による症状の一過性軽快, 周期的嘔吐を三徴とする。国内ではまだ十分に知られていないとはいえず, 初期症状の非特異性, 大麻使用歴の秘匿性, 医療者側の理解不足が診断遅延の一因となっており, 欧米での先行研究では診断確定までに平均4.1年を要すると報告されている。本症例は, 約3年間にわたり心身症と診断され精神科治療を受けていた20歳代男性である。高校在学中より大麻を使用し, 以後, 周期的な嘔吐を呈していた。初診時の診察で入浴により症状が一時的に軽快し, 使用中止後は症状の再燃を認めていないことを聴取し, 診断に至った。本症例は, CHSの診断困難性と特徴的臨床経過を示す貴重な1例であり, 今後の疾患理解と早期診断に向けた一助となることが期待される。本症例報告に際しては, 発表と雑誌・オンラインでの抄録の一般公開について本人より同意を得ており, 個人情報とプライバシーの保護に十分配慮している。

## 10. 北海道大学病院デイケアクリニカルパス運用10年の成果

…………照井涼子<sup>1)</sup>, 神尾春香<sup>2)</sup>, 吉田真桜<sup>1)</sup>, 太田愛美<sup>1)</sup>, 惣万啓太<sup>1)</sup>, 橋本直樹<sup>3)</sup>, 加藤隆弘<sup>3)</sup> (1) 北海道大学病院医療技術部, 2) 北海道大学病院看護部, 3) 北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室)

北海道大学病院精神科神経科 (以下, 当科) デイケアは, 大学病院としては最初期である1984年に開設された。2014年12月には時代の変化に対応した, ハブ型のデイケアへの転換を意図して, デイケアクリニカルパスを開発し導入した。今回われわれはこの10年間の活動をまとめ, 報告した。2014年12月から2024年12月までの間の利用者は58名 (女性26名)であり, 平均年齢は25.4歳であり, そのうちの33名 (56.9%)が統合失調症であった。転帰においては事業所などへの就労, 復職や学校への復学が33名であり, 転帰を測定できた52名中の63%を占めた。当科のデイケアクリニカルパスは, 4期28ヵ月を標準期間として設定しているが, 8ヵ月ずつ3回の延期が可能であり, 平均の在籍期間は24.5ヵ月であり, 32ヵ月以上の利用者も13名いた。なお, 本研究は, 北海道大学病院生命・医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

## 11. EGUIDE プロジェクトー北海道地区における 10 年間の報告ー

……………橋本直樹，堀之内 徹（北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室）

精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究（Effectiveness of GUIDeline for Dissemination and Education in psychiatric treatment：EGUIDE プロジェクト）は、『統合失調症薬物治療ガイドライン』と、『日本うつ病学会治療ガイドライン』の2つのガイドラインについての講習を行い、ガイドラインの内容を社会実装することを目的としている。北海道地区においては北海道大学病院精神科神経科が基幹施設となって講習と調査（処方調査および実践度調査）が実施され、2016年から2024年までの間に66名の教室員が受講したほか、受講者が所属する15施設で調査が実施された。この間に全国の受講者の協力により統合失調症およびうつ病患者の入退院時処方に関する大規模データが整備され、多くの学術的に重要な報告がなされた。本発表では北海道におけるEGUIDEプロジェクトの10年間の取り組みを振り返り、その成果を報告した。なお、本研究は、北海道大学病院生命・医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

## 12. 難治性精神疾患地域移行促進事業について

……………賀古勇輝<sup>1)</sup>，高信径介<sup>1)</sup>，石川修平<sup>2)</sup>，木村憲一<sup>1)</sup>，三井信幸<sup>3)</sup>，橋本直樹<sup>2)</sup>，加藤隆弘<sup>2)</sup>（1）北海道大学病院附属司法精神医療センター，2）北海道大学大学院医学研究院神経病態学分野精神医学教室，3）北海道大学保健センター）

クロザピンは、治療抵抗性統合失調症に対して適用を有する唯一の薬剤であるが、日本での使用率は統合失調症患者の約2.6%にとどまっており、処方率がきわめて低いことが問題視されている。北海道はさらに処方率が低く、2%にも達していない。第8次医療計画において、クロザピン治療が必要なときに必要な場所で受けられるように地域連携体制を構築すべきであることが盛り込まれており、北海道の医療計画でもこれに準じてクロザピンの使用促進について言及されている。クロザピンの処方を促進すべく、2024年度から難治性精神疾患地域移行促進事業が開始された。北海道大学病院に事業委託され、さまざまな取り組みを行い、2025年度も本事業が継続されることとなった。これまでの取り組みの内容と今後の計画について紹介した。なお、本事業で実施されたCPMS登録医療機関へのアンケート調査は、北海道大学病院生命・医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。